キリスト者とされた
絶大な価値を見失うことなく

コリントⅠ1章1～17節
2021年8月01日
松田 基子 師

使徒パウロは、紀元8年にキリキア州タルソスで生まれたとされています。 厳格なユダヤ教徒、ファリサイ派に属する者として育ったパウロは、キリスト者を異端として、迫害の急先鋒を担ぎ、異国のダマスコまでも、キリスト者捕縛に向かいましたが、その途上で、天に帰られたイエス様から、

「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」

と呼び掛けられ、彼はこの天からの声に、彼の全存在が砕かれ、一変してイエス・キリストの福音宣教者に変えられました。

天の御座に坐しておられるイエス様は、彼について、使徒言行録の9章15節で、

「あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。」 と、

宣言されました。 パウロはその召しに応えて、異邦人伝道に心を注ぎ、3回の伝道旅行を行いました。 その中で、第2回目の伝道旅行を、紀元49年に、シリアのアンティオキア教会から出発して、小アジア地方の北部を伝道して周り、ヨーロッパに足を踏み入れ、南下して、紀元51年にコリントに辿り着き、この地で1年半、腰を据えて伝道して、コリント教会を立て上げました。

コリントはギリシャ本土と、ペロポネソス半島を結ぶ地峡に位置しています。 海に挟まれた狭い所です。 コリントは、この地の利を活かして、ペロポネソス半島を大回りすることなく、西のコリント湾と東のサロニカ湾双方に集まる船の貿易品の積み替えを行い、小型船は、そのままコロで陸路を5．5㎞、運ぶ事によって、ヨーロッパとアジア及びエジプト貿易の要になった大都市です。 地中海貿易の東西の、経済、文化の交流地点として、 人も文化も多様性に満ちていました。

パウロの伝道地としては、多くの人々の救いが期待できる所でした。 しかしそこは、異教の神々が人間の欲望を掻き立てている所でもありました。 町の南側には、標高575m の所にアクロコリントスの城塞があり、頂上にはアフロディテの神殿が建っており、千人の神殿娼婦が居て、豊穣の名の下に売春が行われていました。 山の麓には、海上交通の守護神、メリケルテースの神殿があって、商業と文化は栄えていても、人々の内面は、空しさに満ちていました。

一方パウロは、コリントに来て、アキラとプレスキラと言う、素晴らしい信仰者の夫婦に出会い、彼らの協力と、ローマ人のティティオ・ユストや、会堂長のクリスポ一家も救われ、コリント教会を立てあげました。 しかし、ユダヤ教の執拗な攻撃を受けて、コリントを去り、イスラエルに帰り、エルサレムの使徒達に、挨拶をして、異邦人伝道の拠点であるアンティオキア教会へと帰りました。

パウロは暫くして、紀元53年に、第3回伝道旅行に出発しました。今度は、ガラテヤ、フリギアを通ってアジア州の州都エフェソに来て、そこで2年間伝道しました。 エフェソとコリントは、エーゲ海を挟んで、東西に栄えた大都市でした。エフェソとコリントは、人の往来も多く、互いの情報は古代ながら、伝わり易い所にありました。そのような中、エフェソのパウロの耳にコリント教会の様子が伝わって来たのです。

コリント教会は、この世的には繁栄した、大都会の世俗的教会でした。 それに、パウロがコリントに居たのは、僅か1年半です。 十分な信仰教育と信仰訓練が成された訳ではありませんでした。 また、異邦人が多く、生まれた時から律法の下で訓練されて来た、ユダヤ人達とは違って、本能的、この世的生き方を、そのまま引きずった信仰生活者が大半でありました。 そのために、色々な問題が起きて、パウロの助けを借りなければ、収拾が付かない状態になり、 クロエと言う女性信徒が、パウロの許(もと)に使いを送って解決を求めたのでした。

そこで、パウロは、コリント教会宛の手紙を書きました。 それが今朝の、コリントの信徒への手紙Ⅰです。 パウロがコリント教会の人々に一

番自覚して欲しかったことは、
『キリスト者とされた、**絶大な価値の自覚**』
でした。
『信仰歴が浅い、キリスト者となって
まだ、数年しか経っていない。
そんなにいっぺんには変われない。』
と言い訳をするような問題ではありません。
キリスト者になったと言うことは、何よりも、
『この世の存在から、**天の国籍**を
有する存在に**変えられた**。』
という事です。 ですから、これまでの、この世の考え方ではなくて、神様の**お考えを求め**て、そこに立って、**物事を考える**と言う、**生き方**に変わらなければなりません。 パウロは手紙の挨拶で、その事を、先ず明らかにしています。

1章1節には、
「**神の御心によって召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから**」
と、発信者を明らかにしています。
パウロにとって、自分が、イエス・キリストの使徒に召されたことは、神様の御心、御計画の基にあったということの確信です。 パウロは、ガラテヤ書の1章15節でも、
「**わたしを、母の胎内にあるときから、選び分け、**」
と言っています。 共同発信者として、ソステネの名が記されています。 パウロがコリントで伝道した時、ユダヤ人に襲われて、総督ガリオンの法廷に連れ出されましたが、ガリオンが取り合わなかった為に、ユダヤ人たちは、使徒言行録18章17節を見ますと、
「**会堂長のソステネを捕まえて殴りつけた**」
と記されています。 そのソステネと、同一人物であろうと言われています。 彼はその後、パウロの同労者となり、
『パウロがコリント教会に手紙を書くにあたっては、ソステネも共同発信者とする事に寄って、コリント教会は一層、手紙に関心を持ってくれるであろう。』
と考えられた様です。

2節は、受け取り手の、コリント教会の人々の、神様の前にある、存在の尊さを示しています。
コリントにある神の教会へ。 つまり、教会は人間主導の互いの意志で、自由に集まって、いる集合体ではありません。 神様の教会、つまり、神様の御心で御計画の基に、召し集められた者達の集まりです。 即ち、至る所で私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めている全ての人々と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々の集まりです。 教会とは、見ゆるところ、世界には数え切れない程の各個教会がありますが、今朝も私たちは使徒信条で、**公同の教会**と告白しました。 つまり、キリストにある一つの教会なのです。 そこで共通していることは、
『主イエス・キリストを**真の救い主**として、呼び求め、信じて、救われ、
イエス・キリストに結ばれて**聖なる者**とされた存在に**変えられ**ている』 ことです。
そして、イエス・キリストが、全てのキリスト者と共に、私たちの主、つまり、
『わたしの永遠の**存在**の
保証者となっていて下さる』
と、いう事です。

パウロは、コリント教会の人々に、
『キリスト者とは、こんなに素晴らし存在なのだ。』
という事を教えています。 そして、3節に、
「**私たちの父である神と、主イエス・キリストから恵みと平和があなた方にあるように。**」
と、祝福を祈っています。 パウロは神様の祝福の大きさを知って、それが惜しみなく、コリントの人々に注がれるように、また、平和を祈っています。

パウロにとって最大の喜びは、人々の救いでした。 4節に、彼は、
「**わたしは、あなたがたがキリスト・イエスによって神の恵みを受けたことについて、いつもわたしの神に感謝しています。**」
と喜んでいます。 キリスト者とは、キリストに属し、キリストに結ばれることです。 キリストに結ばれることによって、コリント教会の人々はどんな恵みを受けたのでしょうか。 5節で、
「**あなた方は、キリストに結ばれ、あらゆる言葉、あらゆる知識において、すべての点で豊かにされています。**」
と言っています。

コリントの隣りには、哲学の殿堂、アテネがあり

ました。 その影響は大きく、コリント人も思索的で、雄弁を磨き、競い合っていました。 教会の中にも、それは見受けられました。 彼らは、それを自己の誇りとしたのですが、パウロは、
「それは神様からの賜物なのですよ。」
と彼らに教えています。 その、何よりの証明は、彼らがそのように弁を尽くして、イエス・キリストの十字架の贖いを語った事によって、救われる人々が起こされたのです。 救いは、人の業ではありません。 神様の御業です。 それは神様がコリント教会の人々に、そのように賜物として、言葉と知恵を与えて、御業を押し勧めておられる、何よりの証でありました。

七節の岩波訳は、
「**斯**(か)**くして、あなた方は、如何なる賜物においても欠けることなく、私たちの主イエス・キリストの出現を待ち望んでいる。**」
と訳されています。 パウロは、
『**人間の目線**で、見がちになる、
コリント教会の人々の目を、**神様の目線**で
見させ、神様への**感謝を燃え立たせよう**』
と必死でありました。 それこそが、**キリスト者**の真に**あるべき姿**です。 キリスト者の最大の希望は、主イエス・キリストの現れ、即ちキリストの再臨です。

しかし、キリストの再臨は喜びでありますが、また、不安でもあります。 自分の罪深さを知れば知るほど、神様の審きに耐えることは出来ません。パウロはキリスト者を襲う、そのような不安に対して、8節で、
「**主も最後まであなたがたを、しっかり支えて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、非の打ち所のない者にしてくださいます。**」
と、素晴らしい約束を示しています。

パウロは、ガラテヤの3章27節で、
「**洗礼を受けてキリストに結ばれた
あなた方は皆、キリストを着ているのです。**」
と言っています。**私達の内**には、**何の功**(いさを)**しもありません**。 ただ、イエス様の十字架の**贖いに寄る、義の衣**を**着せて**頂く事によって、神様は私たちを、**非の打ち所**の**無い**者と**みて下さる**のです。 神様は、御子イエス・キリストに於いて約束して下さったことは、守って下さる、真実なお方です。 イエス・キリストに救われたということは、この様に、人間には考えられない、法外な存在に変えられているということです。

パウロは、コリント教会の人々に、その自覚を促すために、この様な素晴らし挨拶を送りました。そして、本題に入りました。
『そのような絶大な恵みを頂いているのに、
あなた方の生き方は、相応しい生き方を
しているといえるのですか。』
と言う問いです。 それは教会の中に分派が生じて、分裂の危機に直面している事でした。
彼らは、
「**わたしはパウロにつく**」
「**わたしはアポロにつく**」
「**わたしはケファ**(ペトロ)**に**」
「**わたしはキリストに**」
と言う、パウロ派、アポロ派、ケファ派、キリスト派がありました。 それぞれ、自分の傾倒する指導者の名の許に集まって、自分たちの正当性を主張して、教会の支配力を得ようとしていました。

パウロはコリント教会の創設者でした。
ですから、パウロ派の人たちは、
『自分たちが教会の礎を築いて来た』
と言う自負があったでしょう。 アポロ派の人は、パウロの後にコリント教会を指導した、アポロの信奉者達でした。 アポロは、学問の都アレクサンドリア生まれで、学識が豊かで、雄弁家でしたから、コリントの人々の好みの教師でした。
知識を求める人々は、アポロに傾倒して、アポロ派を造って、パウロに対抗しました。 主に、パウロ派とアポロ派が、対立したようですが、ケファに付くと言うグループも出て来ました。
ペトロがコリントに来たと言うのではありませんが、保守的なユダヤ人は、エルサレム志向が強く、エルサレムから来た巡回教師を通して、イエス様の一番弟子であったペトロに繋がりたいとの思いから、ケファ(ペトロ)派が出て来ました。

他に、キリスト派もいました。 パウロでもアポロでも、ケファでもない、人間の指導者ではなく、
「キリストに従うべきだ」
と言って、中身は自分たちの考えを正当化していた人々です。 どのグループも、

『自分たちが教会での力を持ちたい』
と言う心の表れでした。 キリストに結ばれているとは、およそ言い難い、**自我のぶつかり合い**でした。

パウロは、そんな彼らに、キリスト信仰の本質を語ります。 13節に、

「**キリストは幾つにも分けられて**
しまったのですか。」

と問うています。 教会はキリストの身体として、一体です。 分派を造ると言う事は、キリストの身体を切り裂いている事に他なりません。 そんな事があってはならないのです。 パウロは、信仰の原点に立ち帰らせるために、

「**パウロがあなた方のために**
十字架につけられたのですか。」

と迫り、

「**あなたがたはパウロの名によって**
洗礼を受けたのですか」

と問い掛けました。

そのような無意味なことは誰もしてはならないと言う事は明かです。 しかし、人間の考えに陥ってしまうと、霊的な真理が見えなくなるのです。 パウロは信徒との結びつきに注意しました。洗礼を授ける事にも細心の注意を払って、自分に引き寄せないように、最小限にしたようです。
17節に、

「**キリストがわたしを遣わされたのは、洗礼を授けるためではなく、福音を告げ知らせるためであり、しかも、キリストの十字架がむなしいものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせるためだからです。**」

と言っています。

イエス・キリストの十字架による贖いは、**神様の一方的**な人類への**愛です**。 受ける資格の無い者に注がれた、**キリストの愛です**。 この愛は人間の知恵で探求し、雄弁な言葉で以て語れるものではありません。 唯、神様の愛、キリストの愛を信じて、心から**感謝して、受け取る以外に無い**のです。そして、その愛に応えて、キリストの身体なる教会を立てあげるために、一致して**福音を**、一人でも多くの人に**愛を以て語る**事が、キリスト者の**務め**です。 それが分かった時、パウロが十節で勧めた勧告を受け入れる事が出来るでしょう。

「**皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし 思いを一つにして、固く結び合いなさい。**」

そこで始めて、イエス・キリストの福音を語り、福音の実体を証する事が出来るのです。

自分のために十字架に架かって下さった、イエス様を仰ぐ時、キリスト者は、皆そうせずにはいられなくなります。 私たちも十字架から目を離す時に、その絶大な価値を忘れ、この世の考え、生き方に戻ってしまいます。 わたしたちも何時もその危機に晒されています。 常に**十字架を見上げ**、キリスト者とされた絶大な恵みに**感謝しましょう**。 教会員として、主の体の一部である事の自覚を持って、互いを尊び、助け合い、主の教会を立てあげていきましょう。 共に福音を語り、主の栄光を表すことで一致して参りましょう。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は罪深き私たちを、
イエス・キリストの十字架の贖いにより
救ってくださったばかりか、
キリストに結ばれ、キリストの身体である
教会の一員として下さった事を
心から感謝します。

キリスト者とされた、絶大な価値を
何時も自覚し、十字架を見上げて、
共に主の体とされている人々を尊び、
教会を建て上げて行く者と
ならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。